

ヒトパピローマウイルス (HPV) 検査を受診された方へ

ヒトパピローマウイルス (HPV) 検査について、以下で説明させていただきます。

「子宮がん」と一口に言っても、子宮がんには「子宮頸がん」と「子宮体がん」とがあり、好発年齢・原因・治療法なども異なる全く別のがんです。

そのうち子宮頸がんは、ほぼすべての例でヒトパピローマウイルス (HPV) の感染が関与しているといわれています。

HPV 検査について

HPV 検査は子宮頸がんを引き起こすヒトパピローマウイルス (HPV) の感染を調べる検査です。HPV の型は 100 種類以上ありますが、HPV 検査で調べるのは子宮頸がんとの関係が深い“高リスク型 HPV”です。子宮頸がんの 99% は高リスク型 HPV が原因なので、HPV 検査が陽性だった場合は将来、子宮頸がんを発症するリスクが高くなります。検査法には“グループ検査”と“型判定検査”の 2 種類があり、当会ではグループ検査を行っています。

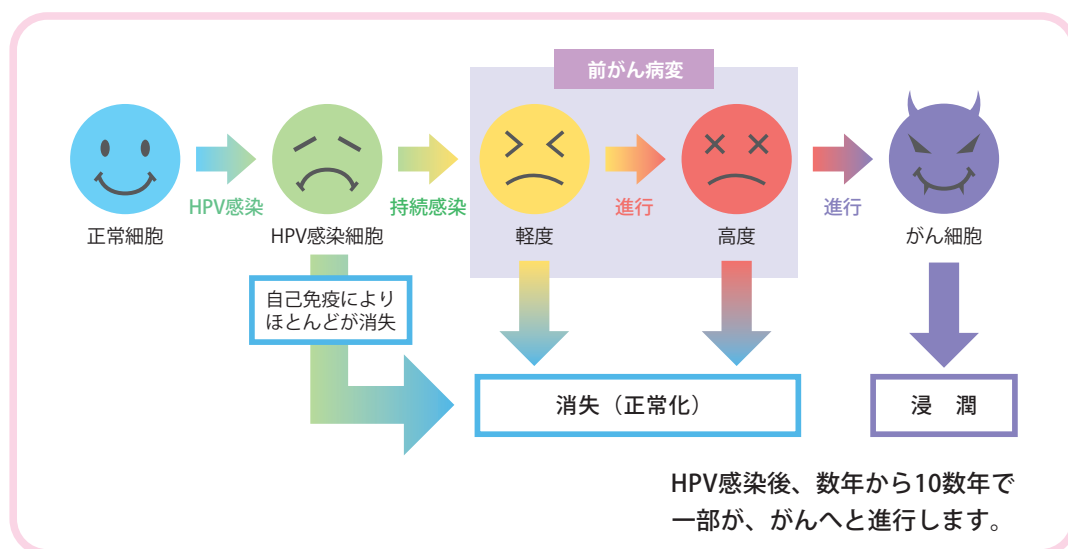
子宮頸がんを引き起こす可能性が高い高リスク型 HPV グループには、16 型、18 型、31 型、33 型、35 型、39 型、45 型、51 型、52 型、56 型、58 型、59 型、68 型の 13 種類の型が含まれます。その中でも特にリスクが高いのは 16 型と 18 型です。

グループ検査の結果は高リスク型 HPV のいずれかに感染しているかどうか、陰性 (-) か陽性 (+) で記されます。陰性 (-) は感染していない、陽性 (+) は感染しているという意味です。グループ検査では、高リスク型 HPV の内どの型に感染しているかどうかまではわかりません。

もし HPV に感染しても子宮頸がんになるのはごくまれです。HPV は大半の女性が一度は感染するごくありふれたウイルスで、女性の生涯罹患率は 80% とも言われますが、大多数は一時的な感染で約 90% は HPV が自然消失します。約 10% の HPV 感染ではウイルスが消えずに長期化しますが、感染が長期化しても簡単には子宮頸がんになりません。

子宮頸がんに行進する場合でも、HPV 感染から子宮頸がん発生までには数年から十数年くらいの年月がかかります。しかも、いきなり子宮頸がんが発生するわけではなく、「前がん状態 (異形成)」と呼ばれる状態が長期間にわたって見られます。

「前がん状態 (異形成)」は程度の軽いものから重いものまで様々ですが、軽度のものは自然治癒したり、あるいは検査を行うことによって HPV が削り落とされ治癒するケースも少なくありません。



検査結果が陽性だった場合

HPV 陽性（+）の場合、陰性の方よりも子宮がんになる可能性が高いと考えられます。HPV に感染したからといって必ずがんになるわけではありませんが、今後の病態進行は個人差が大きく、専門医のもとで経過を見る必要がありますので、婦人科を受診してください。

検査結果が陰性だった場合

HPV 検査の結果が陰性（-）の場合は、高リスク型 HPV に感染していないので、子宮頸がんにかかる可能性は低いといえます。それでもそのほかの婦人科疾患の予防・早期発見の為に定期的な婦人科検診受診をおすすめします。

細胞診と HPV 検査を併用することで、病変の発見率はほぼ 100%になります。アメリカ産婦人科学会の「子宮頸がん検診ガイドライン」では、30 歳以上の全女性に細胞診と HPV 検査の併用検診が推奨されています。

※ 2022 年度から従来より精度の高い検査法（リアルタイム PCR 法）に変更になりました。

